

22 オランダ人医師ファン・デル・ヘーデンと子孫・縁者たち

蒲原 宏

明治七年(一八七四)年県立新潟医学校お雇い教師として来日したヘーデン(歌電・浦田、Wilhelmus Hubertus van der Heyden 1844.5.17〜)はその後、神戸病院同医学校、東京大学医学部、横浜一般病院に勤務し、明治初期の日本の医学教育に大きな貢献をした。その後一時帰国したが再来日し中央衛生委員兼日本薬局方編纂委員としても活躍した(明治十七年九月)。

明治二十七年(一八八九)七月リウマチの治療のためフランスに赴いたが、その後再来日し、横浜万治病院に勤め、明治三十八年(一九〇五)一月七日辞任、一月十四日のマルセイユ行きフランス船オーストラリアン号で離日したが、その死没年月日、死亡地が不明である。

ヘーデンの著書としては卒業論文(Utrecht大学)①

Over het ontstaan van aangeboren misvormingen door ammonstrengen, P.W. van De Weijer, Utrecht, 1871.

② Our knowledge of Cholera, General Hospital Yokohama, Yokohama, 1886.

③ 和訳・世界語辞林 (Yodasbuk Volpükik-Yapanik, 1888) 松下抱次郎発行(横浜)佐々木隼士(高知県出身)との共著。

④ 世界語文典和訳(フランスのケルクホーフス氏原著の和訳)佐々木隼士との共著、一八八八年、松下抱次郎発行(横浜)

ヘーデンは一八四四年五月十七日オランダの Vinkeveen に生まれ、Utrecht 大学卒業後来日し、長崎で内山豊太郎の次女内山とよを現地妻とし、新潟に赴任した。

明治九年六月で内山とよは十八歳。すでに明治八年に長男トーマス(Thomas van der Heyden 1875-1952)を生んでいる。その娘が Rosalie v.d. Heyden (一九一四〜現存)でトーマスがアメリカに渡ってからの子供であるが、Alexander Sherwin (一九一〜現存)と結婚し、その子 Richard T. Sherwin (一九四三〜現存)は曾祖父ヘーデン

の遺品を若干所蔵している。

現在、1050 Edgewood Chase Dr. Glen Mills Pennsylvania 19342 に在住している。

Richard には兄 Kenneth Sherwin (一九四二〜現存) がいるがヘーデンの遺品はない。

ヘーデンは同胞一三人の五番目であるが、四番目の同胞 Wilhelmina v.d. Heyden が van Spanje (医師) に嫁し、Henriette と兄二人 (医師) を生む。

Henriette が A. Nuyens に嫁すが、一九五一年にカナダに移住する。Henriette 七人の子供を生むが Marietta が来日中に横浜生れの中国人間卓中と結婚し香港に移ったが、現在 Ottawa 住。

Henriette Nuyens は現在、35 Marlborough Avenue, Ottawa, Ontario K1N8E6, Canada に在住しているが、ヘーデンに関する資料は所蔵されていない。

現在、オランダでヘーデンの資料を探索している Ben J.J. van Spanje (Arnhemse Bovenweg 253 NL 3971 Driebergen, Netherlands) が最も追求の手をのびしている。

ヘーデン家についての詳細な調査は、オランダの Limburg 公文書館の記録員であった B. Nuyens 夫人の調査によるものを Henriette Nuyens 夫人がまとめたものが最も信頼できる。

これに Richard Sherwin の家系を結合させると、W. H. van der Heyden のヘーデン家系上の位置がはっきりする。

しかし、現在判明しているヘーデン家ゆかりの人々、ことに、ヘーデンの直系の子、Thomas の子孫においても、ヘーデンの、死没年月日、死亡地は依然として不明のままである。

またヘーデンの現地妻の名も、内田とよ (SAEKIA UCHIDA, SALKIA UCHIDA) と書かれてあるもの内田のぶとあるものがあるが、内山とよ (肥前国長崎町) が正しいと考えられる。

ヘーデンにはまだ不明の点があり、今後も追求していくべき。

(日本歯科大学医の博物館)